



教皇様の聲

2

238号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©2000

啓示の光を迎える

〔「神殿へ向かい、高齢者シメオンと預言者アナと共に神を迎えましょう。啓示の光を迎え、(...)大聖年二千年を心に抱きながら、人々の間にキリストの啓示を広めましょう。」教皇様は、二月二日主の奉獻の祝日に、聖ペトロ大聖堂で行なわれたミサの説教の中でこう言われた。〕

1 異邦人を照らす啓示の光。(ルカ2・32参照)
イエスが生まれて四十日が過ぎたとき、マリアとヨセフはイエスを主に捧げるため、神殿に向かいました。(ルカ2・22参照)それはモーセの律法に「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」(ルカ2・23)と書いてあったからです。また、「主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽」(ルカ2・24)をいけにえとして捧げるためでもありました。

これらの出来事を思い出すと、典礼が意図的に、また明らかに、キリスト生誕四十日目以降についての福音書の記述に従っていることがわかります。復活と昇天の間についても典礼は同じように従っています。

今日祝われる福音書の出来事の中には、3つの基本的な要素が見られます。キリストが神殿にやって来るといふ神秘、シメオンとアナがキリストと出会うこと、そして幼子についてのシメオンとアナの預言です。

2 まず第一に、主が来られるという神秘について考えてみたいと思います。聖書朗読では、神が来られるという驚くべき出来事が強調されています。預言者マラキは有頂天になって主の到来を告げ、詩篇もそのことを歌い、ルカの福音書にも記されています。私たちは、それをただ聞きさえすれば良いのです。たとえば詩篇を見てみましょう。「城門よ、頭を上げよ... 栄光に輝く王が来られる。栄光

に輝く王とは誰か。強く雄々しい主、雄々しく戦われる主。... 万軍の王、主こそ栄光に輝く王。」(詩篇24・7~8; 10)

真理と永遠の大司祭を見よ

何世紀も待ち望まれていた主がエルサレムの神殿に入って来られます。主は預言されていたメシアとして旧約の契約の約束を果たします。詩篇作者は主を「栄光に輝く王」と呼びます。主の国がこの世のものではないことが明らかになるのは後になってからです。(ヨハネ18・36参照)この世に属する者は、キリストのために王冠ではなく、いばらの冠を準備していることも明らかになります。

しかし、典礼はより深い部分を示しています。生後四十日目の子に「光」を見い出しますが、その光は国々を照らすものです。「栄光」の幼子がイスラエルの民に現れるのです。(ルカ2・32参照)その幼子こそ、死を克服するという使命を持つ者です。ヘブライ人への手紙では、託身と贖いの神秘が述べられます。「ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。」(ヘブライ2・14)神ご自身が人間とされたのです。

ヘブライ人への手紙では、託身の神秘が言い表わされると、次に贖いの神秘が示されます。「それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大司祭となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです。」(同上2・17~18)この記述は、キリストの神秘についての深い、また感動的な点を表しています。ヘブライ人への手紙を読むと、主が

エルサレムを訪れることについてより良く理解できるでしょう。つまり、マリアから生まれたばかりの幼子がエルサレムにやって来るということが、救いの歴史において決定的な出来事だったということですから。その神殿は、建てられた時から、約束されていた方を特別に待ち続けていました。

3 今日の祝日に関する2番目の特徴は御子との対面です。幼子イエスを連れたマリアとヨセフを待つ者はいませんでした。人々の間に隠れて聖家族がエルサレムの神殿に着いた時、非常に特別なことが起こります。聖家族はそこで、聖霊に導かれた二人に出会います。その内の一人はシメオンで、聖ルカは次のように記しています。「この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。」(ルカ2・25~26) もう一人は預言者アナです。「若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ、八十四才になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えて」(ルカ2・36~37) 暮らしていました。ルカは更に続けます。「そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。」(ルカ2・38)

メシアの到来は気付かれぬままに終わらない

シメオンとアナは旧約の契約を代表する二人ですが、この二人は全生涯をかけてこの瞬間、つまり、待望のメシアがエルサレムの神殿を訪れる瞬間のために生きてきたと言えます。シメオンとアナはついにその瞬間が来たことを理解します。二人は主と出会うことでそれを確信し、人生の最後の時を平和の内に迎えることとなりました。「主よ、今こそあなたは、御言葉どおりこの僕を安らかに去らせてください。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」(ルカ2・29~30)

この出会いは決して目立つものではありませんでしたが、シメオンとアナの言葉と行動によって、主が訪れた事実が効果的に表されています。メシアの到来は誰にも気付かれぬものではありませんでした。主の訪れは信仰の鋭いまなざしを通して確認され、それをシメオンが感激の言葉で言い表しています。

4 この祝日の三番目の要素は「預言」です。今日、真の預言的言葉が再び鳴り響きます。毎日、「教会の祈り」はシメオンの靈感を受けた賛美で一日を終えます。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を去らせてください。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。... 異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れで

す。」(ルカ2・29~32)

高齢者シメオンはマリアに向かって付け加えます。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。あなた自身も剣で心を刺し貫かれます。多くの人のある思いがあらわにされるためです。」(ルカ2・34~35)

この時、イエスの生命はまだ始まったばかりであるにも関わらず、私たちはすでにカルワリオに向けられています。まさに十字架の上において、イエスは反対を受けるしるしとして決定的に定められます。そして、同じカルワリオにおいて、御母の心は悲しみの剣で貫かれます。イエス誕生40日目に始まる最初の時から、私たちは全てを教えられているのです。だからこそ神殿でのイエスの奉獻の祝日は、教会の典礼の中でこれほど重要なものとなったのです。

5 兄弟姉妹の皆さん、今日の祝日によって、新たな意義を持つこの年が豊かなものとなるでしょう。実際、奉獻生活の日を祝うのは初めてのことで

兄弟姉妹の間に光を広めましょう

修道者、そして世間の組織や社会で使徒的な生活を営む人々も皆、大切な仕事を任されています。言葉と模範によって、人間の全ての本質を越える絶対者の卓越性を宣べ伝えるという仕事です。この仕事は緊急に行われる必要があります。現代は、神についての純粋な意味が失われてしまったように見えることがしばしばあるからです。この最初の奉獻生活の日で告げたメッセージを思い出してみましょう。「本当に急がなければならぬのは、捧げられた生命をかつけないほどに『喜びと聖霊とに満たされて』示すことです。その生命は、宣教の道に力強く備えられ、生ける証人の強さによって支えられます。というのも、『現代人は、教師の言うことよりも、あかしをする人の言葉を喜んで聞きます。教師の言うことを聞くときは、教師があかしをする人だからです。』(使徒的勧告「福音宣教」41)」(「ロッセルバトーレ・ロマーノ」p.3、英語版、1997年1月29日)

高齢者シメオン、預言者アナと共に、神と会うために神殿へ向かいましょう。啓示の光を迎え、(...)大聖年二千年を心に抱きながら、人々の間にキリストの啓示を広めましょう。

幸いなおとめ、希望と喜びの母が共にいてくださいますように。全ての信者が救いの証人となることができますように。神が託身の御子イエス・キリストを通して、全人類のために救いを用意されました。異邦人を照らす啓示の光、イスラエルの民の誉れであるキリスト、アーメン!

(1997・2・2)

「ナザレトのマリア」 フェデリコ・スアレレス著 本体価格一九四二円
「キリストへ行く道はマリアを通る道だ。キリストに戻る道もマリアを通るのだ。」(『道』) キリストに倣う最上の方法は、聖母に習うことである。マリアほど忠実・正確に御子のイメージを再現した者はいなかった。著者は、歴史学者の目で聖母の生涯を黙想する。

神の御言葉だけが生きる意味を教える

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、

1 この世の状態を深く考えると、落胆や不安さえ感じる人は少なくありません。多くの人々が、価値の欠如によって混乱した個人や団体の行為に困惑しています。最近の出来事について考えさせられるのは当然です。注意深くニュースを見ると、背筋が寒くなるような空虚さを感じるでしょう。

これらの出来事の原因について考えずにおれるのでしょうか。希望をもって未来を見つめられるよう、生命の神秘を明らかにしてくれる人を求めずにはられません。

聖書では、預言者がその使命を担っていました。預言者は聖霊によって導かれ、自らの名においてではなく神の名において語ります。

当時の人々にとってはイエスもまた預言者のように映りました。強い印象を受けた人々は、イエスを「行いにも言葉にも力のある預言者」(ルカ2:4~19)だと考えました。イエスはその生涯、特にその死と復活によって、特に優れた預言者と認められましたが、実は神の御一人子でした。ヘブライ人への手紙で次のように書かれています。「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」(ヘブライ1:1~2)

2 ナザレの預言者の神秘は私たちが応えることを求め続けています。福音書におけるイエス

のメッセージは何世紀、何千年たっても時代遅れになることはありません。イエスご自身、次のように言われます。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」(マルコ13:31) 受肉された御子イエスにおいて、神は人間と歴史について真理を語り、教会はそれが人間の生命に完全な意味を持たせる唯一の言葉であることを確信し、常に信頼を新たにしながらその真理を繰り返します。

イエスの預言的メッセージを聞いて困惑する人がいるかもしれません。けれどもそれはいつも人間に救いをもたらすものなのです。キリストは、反対を受けるしるし(ルカ2:34)です。イエスは靈魂の最も深い部分に触れて、ご自分に耳を傾ける人々には、自分自身で問いかけ心を入れ換えることを要求なさるからです。

3 大聖年へ向かう旅路が、信じる者にとって絶え間なくキリストを再発見する機会となります。これこそ急を要する大切なことです。ローマの家族の皆さんにマルコの福音書を差し上げたのは、この点を強調したかったからです。この私の願いや、またそれに似たことが教会の中で広まることを望んでいます。

聖なるおとめマリアの御助けによって、私たちがイエスの言葉を素直に受け入れ、勇敢に熱心にその言葉を伝える証人となることができますように。

(1997・1・26)

健全な社会は安定した家庭の上に成り立つ

新しい千年期を迎えるに当たって、結婚や家族を奨励することはキリスト教共同体が直面している重大な責任である。

1 大聖年を相応しく準備するために、キリスト教共同体は家庭と結婚の価値を再発見するために献身すべきです。(「紀元2000年の到来」51番参照) 今日とはとりわけ急いでこのことに取り組まなければなりません。というのも、文化や社会の様々なレベルで、結婚や家庭の価値について異議が唱えられているからです。

模範的な家庭生活の一定のモデルが疑問視されるだけではありません。社会の変化や新しい仕事の形態などからプレッシャーを受け、家庭生活は変化しています。家庭の概念は、共同体が男女の間の結婚の上に築いたものですが、その家庭についての

考え方が、倫理的相対主義の名の下に攻撃されています。このような考え方は世論や法律制定面に及ぶ広い範囲で広がっています。

人間が持つ親としての心の源は神の父性である

家庭の危機はそのまま社会の危機の原因となります。様々な病的な現象もまた、孤独から暴力や麻薬まで、家庭がその本来の意味や目的を失っていることが原因です。家庭崩壊が起こると社会はその最小単位を失うことになり、子供や青少年、障害者、病人、高齢者など一人ひとり、特に弱者に悲惨な結果

がもたらされることとなります。

2 従って、信じる者だけでなく正しい意志を持つすべての人々が、結婚と家族の価値を再発見するよう励まさなければなりません。カトリック教会のカテキズムには次のように書かれています。

「家族は『社会生活の根源的な細胞』である。家族は自然の社会で、その中で一組の男女が愛の内に自己を与え合うように呼ばれている。両親と子供の間には正当な権威の行使と安定した相互の関係があるなら、社会に自由、安全、兄弟愛が見られることだろう。」（2207番）

理性自体は、人間の心に刻まれた道徳律に耳を傾けることによって、家庭について再発見できます。

「愛に始まり、愛によって生命を与えられている」

（使徒的勧告「家庭」18番参照）共同体として、家庭は絶対的な愛の契約から力を引き出します。その契約とは、男女がお互いに自らを捧げ合い、共に生命の賜物において神の協力者となることです。

この基本的な愛の関係に基づいて、他の家族の一員との間にも認められる関係にも、愛情と互いに助け合うという特徴が示されなければなりません。家庭はその中だけに留まるどころか、その純粋な愛情が社会全体に開かれています。というも、小さな一つの家族と人類全体の大家族は対立するものではなく、密接で根本的な関係にあるからです。このことの根底には、まさに神の秘義があります。家庭では特別にこの秘義が再現されます。実は数年前に「家庭への手紙」の中で次のようなことを書きました。「新約の光に照らしてみると、家庭の原型は神ご自身のなかに、三位一体のいのちの秘義のなかに探さなければならない、ということがわかります。神の『われわれ』は人間の『われわれ』の永遠の原型、とくに、何よりも神にかたどり、神の似姿としてつくられた男と女によって形成される『われわれ』の永遠の原型となります。」（「家庭への手紙」6番）

3 神の父性は、人間の父性や母性の超自然的な源です。愛を込めて深く考えると、交わりについての価値を再発見するよう駆り立てられるのを感じます。子供を産むことや結婚や家庭を特徴付ける生活についての価値です。

家庭内での関わり合いは、それぞれが具体的な仕事を任されることで発展します。しかし融通のきかない型にはまったものではありません。ここで述べ

ようとしているのは、特定の歴史・文化の内容を表す社会や機能上の役割ではありません。考えていることはむしろ、相互的な夫婦の関係や親としての義務を分担することの大切さです。男性も女性も、深く豊かに尊重し合うことで、それぞれのあるべき性質を実現するように呼ばれています。「神はこの『一致した二人』に、生命を産み出す仕事や家族生活だけでなく、歴史の創造をもお任せになりました。」（「女性への手紙」8番）

4 子供は夫婦の一致の最高の現れだと見なされなければなりません。「もう一人」の家族である子供は、互いに与え、受け取り合うという二人の献身が満ちあふれた結果だとも言えるでしょう。子供は神の祝福です。神は夫を父に、妻を母とします。（使徒的勧告「家庭」21番参照）夫婦は「自分自身」を、その子供に表します。子供は二人の愛の実りですが、二人を越えるものでもあります。

家庭は生命を迎え育てる場所

イエスの司祭的な祈りの中で手本が示されます。弟子たちと弟子たちを通じて信じるようになった人間が（ヨハネ17・20～21参照）、イエスと御父との間にある一致を真似て一致するように（ヨハネ17・11参照）、とイエスは祈ります。この祈りは特に家庭に当てはまります。キリスト者の家庭、「家庭教会」（「教会憲章」参照）に求められているのは、完全な一致というこの理想を達成することです。（...）神の父性に照らして家庭を再発見しましょう。神である御父について良く考えると、特に歴史的なこの瞬間のチャレンジにに対して、大いに関心をもつよう促されます。

神である御父を眺めることは家庭についての理解につながります。家庭は生命を迎え育て、兄弟愛を学ぶ場所でもあります。そこではキリストの霊に助けられて、「新しい友愛と連帯、至聖なる三位一体に固有な、互いに自らを与え相手を受け入れる神秘についての真の省察」（「いのちの福音」76番）が人々の間に作りだされます。

新たにされたキリスト者の家庭の経験から教会が学ぶことは、信者の間にもっと家族的な特徴を育てるために、より人間的で兄弟的な関わりを受け入れ強めることが必要だということです。（「家庭」64番参照）
（1999・12・1）

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円（税込）
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人 ■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920
FAX. 0797-34-4920 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

* 電話受付時間は月・木・金曜日午前10：00～12：00、水曜日午前10：00～午後5：00となっています。

イエスの隠れた生活と公生活

(イエスは神でありながら私たちと同じ生活、目立たない平凡な生活をマリアとヨセフに従って過ごされました。続く公生活もイエスの行動は神に従うことに基いています。今回も「カトリック教会のカテキズム」を試訳でお届けします。)

イエスの隠れた生活の秘義

531 イエスは、その人生の大部分を、圧倒的多数の人間と同じ生活を送られた。すなわち、表面的には何の重要性もない日常生活、肉体を使う労働者の生活、神の律法の規定を守るユダヤ人の宗教生活(ガラチア4・4参照)、村人の生活である。聖書は、イエスはこの全期間を通じて、両親に「仕え、・・神と人の前で知恵も背丈も寵愛も増していかれた」と言っている(ルカ2・51-52)。

532 イエスは母親と法的父親に従うことによって、第四戒の掟を完全に果された。このようにして、いかに天の御父に従っておられるかを目に見える形でお示しになった。毎日の生活の中でヨセフとマリアに従うイエスは、それによって「私の願いではなく、御心のままに」(ルカ22・42)という聖木曜日の従順を予告し、それに先立って実践しておられた。キリストは、隠れた生活の日常の中で従うことによって、アダムが不従順によって破壊したものの復興の事業をすでにお始めになっていた(ローマ5・19参照)。

533 ナザレでの隠れた生活は、私たち皆が最も平凡な生活を通してイエスとの交わりに至ることができることを教える。：ナザレの家庭は、イエスの一生のイロハを教える学校、すなわち福音の学校であります。・・それはなによりもまず、沈黙の重要性を教える学校です。願わくは、私たちが沈黙の大切さを評価できますように。でなければ、深く優れた霊的生活を送ることは不可能ですから。・・ナザレはまた家庭生活についての学校です。私たちがナザレから、家族とは何か、つまり、その愛の交わり、素朴で単純な美しさ、家族が神聖で犯すことのできないものであることを学びますように。・・また、労働の学校でもあります。おお、「大工の息子」の家であるナザレよ、私たちは、ここで人間の仕事の厳しさと贖いの価値を理解し褒めたたえたい。・・。そして最後に、ここで全世界の労働者に挨拶を送り、彼らにこの偉大な模範、神である兄弟を紹介したい。(パウロ6世のナザレにおける説教。1964年1月5日)。

534 イエスが神殿で見つけられた事件は、隠れた生活について唯一福音書が沈黙を破って語る事件である(ルカ2・41-52参照)。これによってイエスは、ご自分が神の子としての使命にすべてを捧げておいでになるという秘義を垣間見せる。「私が私の父の家にいるはずだと知らなかったのですか」というイエスの言葉の意味を、マリアとヨセフは分からなかったが、信仰をもってこの言葉を受け入れた。マリアは、イエスが平凡な毎日を沈黙のうちに隠れて過ごされた年月の間ずっと、「これらのことをすべて心に納めていた。」

III イエスの公生活の秘義

イエスの洗礼

535 イエスの公生活は、ヨルダン川でヨハネからお受けになった洗礼によって幕を開ける(ルカ3・2・3参照)。ヨハネは、「罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼」(ルカ3・3)を宣べ伝えていた。無数の罪人、税吏や兵士(ルカ3・10-14参照)、ファリサイ人やサドカイ人(マテオ3・7参照)、そして遊女(マテオ21・32参照)たちが、彼から洗礼をうけるために来た。「そのとき、イエスが来られた。」洗礼者は躊躇するが、イエスに諭され、洗礼を授ける。そのとき、聖霊がはとの形で現れ、イエスの上に降り、天から声がして言った、「これは私の愛する子である」と(マテオ3・13-17)。この事件は、イエスがイスラエルのメシアであり神の子として公に示された(「公現」)という意味をもつ。

536 他方、主の洗礼は、苦しむしもべの使命の受諾と開始をも意味する。イエスは、罪人の中に数えられることを拒否されなかった(イザヤ53・12参照)。彼はすでに「世の罪を除き給う神の子羊」(ヨハネ1・29)と呼ばれる。ヨルダン川での洗礼は血生臭い死の洗礼(マルコ10・38;ルカ12・50参照)を予告する。「正しいことをすべて行う」(マテオ3・15)ために来られたと言われ、神の御旨に無条件に服することをお示しになった。すなわち、私たちの罪を赦すために死の洗礼を愛によって受諾されたのだ(マテオ26・39参照)。この受諾に答えて、御父は「これはわたしの心に適う者」であることを明らかにされた(ルカ3・22;イザヤ42・1参照)。イエスが受胎の瞬間から溢れるばかりにもっておられた霊が、彼の上に「とどまった」(ヨハネ1・32-33。またイザヤ、11・2参照)。彼からこの霊が全人類のために流れ出るであろう。イエスが洗礼を受けられたとき、「天が開いた」(マテオ3・16)が、それはアダムの子によって閉じられた天であった。そして、水はイエスと聖霊が下られたことによって聖化されたが、これは新しい創造の序曲のようであった。

537 キリスト教徒は、受洗の際に、洗礼において死と復活を予め行われたイエスに秘跡的な仕方で見るとなる。すなわち、信者は、謙遜に自らを卑しめ罪を悔い改めるといふ秘義に入り、イエスとともに水に入り、イエスとともに水から出、イエスにおいて御父の愛する子になり、「新しい命に生きる」(ローマ6・4)ため、水と聖霊によって生まれ変わらねばならない。：キリストとともに復活するために、洗礼によってキリストとともに我々を葬り去ろう。彼とともに栄光を受けるために、立ち上がろう(ナチアンツの聖グレゴリウス, Orationes, 40, 9)。キリストに起こったすべてのことを見ると、我々の洗礼においても、水に浸かった後、聖霊が天の高みから我々に下り、受洗者は御父の声を受けて神の子となると考えられる(聖ヒラリウス, In Evangelium Matthaei, 2)。

イエスが誘惑を受ける

538 福音書によれば、イエスはヨハネから洗礼を受けた直後、荒野で孤独の時を過ごした。「霊に導かれて」荒野に退き、イエスはそこで40日の断食をする。動物たちと共に暮らし、天使がかれに仕えていた(マルコ1・12-13参照)。このときの終わりに、悪魔が彼を3回誘惑し、御父に対する信頼を試そうとした。これらの攻撃は、アダムの誘惑と砂漠でイスラエル民族が受けた誘惑の要約であるが、イエスはそれらを退け、悪魔は「時がくるまで」彼から離れた(ルカ4・13)。

539 福音の著者たちは、この不思議な出来事が救いのためにもつ意味を指摘する。イエスは新しいアダムであるが、アダムが倒れたところで、イエスは忠実を堅持した。イエスはイスラエルの召命を完全に果たした。すなわち、イスラエル人たちが砂漠で40年間神をためし続けたのに反し、イエスはご自分が神の御旨に完全に従う神のしもべであることを示した。これによって、イエスは悪魔に打ち勝った。イエスは、「強い者を縛り上げて」、彼が奪ったものを取り返した(マルコ3・27)。荒野でのイエスの悪魔に対する勝利は、御父への子としての愛から生まれた最大級の従順である受難の勝利を予告している。

540 イエスの受けた誘惑は、悪魔が勧め人間が彼に望んでいたメシア像(マテオ16・21-23参照)がいかなるもので、またそれとは異って神の子がいかなるメシアであるべきかを明らかにした。キリストが私たちのために悪魔に打ち勝ったというのは、このためである。「この大司祭は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」(ヘブライ4・15)。教会は毎年、四旬節の40日間に、イエスの砂漠での秘義と一致する。

「神の国は近づいた」

541 「その後、イエスはガリラヤに行き、神の福音をのべ伝えて、『時は満ち。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた」(マルコ1・15)。「キリストは父の望みを果すために、地上に天の国を開始した」(教会憲章、3)。なぜなら、父の意志は、「人々を神の生命への参与にまで高めること」であったからである(前掲憲章、2)。それは、ご自分の御子イエス・キリストの周りに人々を集めることによって実現された。この集まりが教会であって、教会はこの地上において「天の国の芽生えと開始」(前掲憲章、5)である。

542 キリストは、この「神の家族」としての人間の集まりのまさに中心である。キリストは、言葉によって、神の国を示すしるしによって、また弟子たちの派遣によって、人々をご自分の周りにお集めになる。そしてなによりも、十字架上の死と復活によって、つまり過越しの神秘によって、その王国を到来させるであろう。「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」(ヨハネ、12章、32)。すべての人は、このキリストとの一致に呼ばれているのである(教会憲章、3参照)。

神の国を告げる

543 すべての人が、神の国に入るように招かれている。このメシアの国は、まずイスラエルの子らに告げられたが(マテオ10・5-7参照)、すべての民族のためである(マテオ8・11; 28・19参照)。しかし、その国に入るためには、イエスの言葉を受け入れる必要がある。：主のことばは、畑にまかれた種と比べられる。信仰をもって主のことばを聞き、キリストの小さな群の中に数えられる者は、神の国を受けたのである(教会憲章、5)。

544 神の国は、まず貧しい人々や小さな人々、すなわち謙遜な心でそれを受け入れる人々のものである。イエスは、「貧しい人々に福音を告げる」(ルカ4・18; 7・22参照)ために遣わされた。主は貧しい人々が幸せであると宣言された。なぜなら、「天の国はその人たちのものであるから」(マテオ5・3)。また、小さな人々には、神は知恵ある人や賢い人には隠されたことをお現しになった(マテオ11・25参照)。イエスは、馬小屋から十字架に至るまで貧しい人々と同じ生活をされる。たとえば、空腹(マルコ2・23-26; マテオ21・18参照)、喉の渇き(ヨハネ4・6-7; 19・28参照)、そして生活必需品の欠如(ルカ9・58参照)を経験された。そればかりか、あらゆる種類の貧しい人々と一致し、彼らを愛することを天の国に入るための条件とされた(マテオ25・31-46参照)。

545 イエスは、天の国の宴会に罪人を招待される。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マルコ2・17。1ティモテオ1・15参照)。主は彼らを改心に招く。なぜなら、改心は天の国に入るための必要条件であるから。そして、ことばと行いによって、神が罪人に対して抱いておられる慈しみは限度がなく(ルカ15・11-32参照)、「悔い改める一人の罪人については、天には大きな喜びがある」(ルカ15・7)とお教えになる。この愛の最高の証拠は、「罪が赦されるために」(マテオ26・28)ご自分の命をお捧げになったことである。

546 イエスは、たとえ話しを使って人々を天の国にお招きになったが、これは彼の教えの特徴である(マルコ4・33-34参照)。たとえ話しをもって人々を王国の宴会に招待される(マテオ22・1-14)が、同時に天の国に入るために根本的な選択、すなわち、すべてを捧げることを要求される(マテオ13・44-45参照)。ことばだけでは十分でなく、行いが必要である(マテオ21・28-32参照)。たとえ話しは、人間にとって自己を写す鏡のようなものである。神のことばを堅い土のように拒否するのか、それとも良い土壌のように吸収するのか(マテオ13・3-9参照)。神から受けたタレントで何をするのか(マテオ25・14-30参照)。それらのたとえ話しの中には、イエスとこの世にある神の国の秘密が隠されている。「天の国に秘密を悟る」(マテオ13・11)ためには、この王国に入ること、すなわちキリストの弟子になることが必要である。「外の人々」(マルコ4・11)にとっては、たとえの教えはどこか謎めいたものである(マテオ13・10-15参照)。(続く)